水野教育長記者会見　概要

日時：令和７年１月20日（月）16時00分～16時40分

場所：大阪府庁別館６階　委員会議室

【水野教育長より】

教育委員会の取り組みについて

**①令和10年度入学者選抜にむけての制度改善方針（案）について**

先ほど開催しました教育委員会会議において、入学者選抜制度改善方針（案）を定めました。

今後、この案をもとに様々なご意見をいただき、3月の教育委員会会議で最終決定をする予定です。

選抜改善につきましては、大きく二つの目的から実施するものです。

１つめは、各校が特色化・魅力化を推進するとともに、受験生が自身の得意や個性、興味・関心等を考え、将来の自己実現に繋がる選抜とすることです。

2つめは、高等学校の入学に向けて、高等学校と入学生の双方の準備期間が十分に確保され、入学生が中学校から高等学校にスムーズに進学できることです。

具体的な選抜制度改善点は大きく2点ございます。

まず一つめは、アドミッションポリシー枠（仮称）の導入です。名称としましては、仮称という形です。

今回、新たに合格者決定の第1手順として、アドミッションポリシー枠（仮称）を設定しまして、より高校の特色と、受験生の興味・関心とが合致する選抜制度をめざします。

なお、高校における教育内容を充実することが不可欠であり、魅力ある授業、充実した学校行事、手厚い生徒支援体制など、各学校がそれぞれの強みを改めて見つめ直し、スクールミッション等に沿って、どのように特色化、魅力化を進めていくかが重要なポイントとなります。

このアドミッションポリシー枠（仮称）の検査については、学校の特色に応じた実施区分を設定して募集を行い、選抜資料については、学校独自の検査を実施するなど、柔軟な方法を採用いたします。

２つめは、選抜の日程・機会の変更についてです。

合格者発表後から入学までの期間を高校生活に向けた準備期間として、保護者相談会や体験授業、出身中学校等との情報共有等の時間等を確保するため、これまでの「特別入学者選抜」と「一般入学者選抜」を統合し、新たな一般選抜として実施をいたします。

また、日程を一本化することにより、現行より受験機会が減少することから、複数校志願制度を導入いたします。

詳細については、会見終了後に、この件についてのブリーフィングの機会を設けますので担当者にご質問いただければ、ご説明をさせていただきます。

**②大阪府立学校教室内装改修（モデル実施）について**

現在の府立学校は、昭和40年代後半から50年代前半の児童生徒急増期に建てられた校舎が多く、老朽化が進んでいます。

「府立学校施設長寿命化整備事業」により、築86年を迎える寝屋川高校では、建て替えの計画を進めていますが、完成には長期に及ぶ調整と、膨大な費用が必要となり、同時に複数校を建てることは、現実的には困難であろうと考えています。

そこで、生徒の皆さんが少しでも快適に過ごせるように、長時間過ごす普通教室や廊下の改修を試験的に行いましたので、ご紹介いたします。

三国丘高校は築30年です。教室や廊下は、塗装の剥がれや黒ずみが目立っていました。

昨年の夏休みに、2年生と定時制の生徒が使用するフロアの教室と、廊下にて塗装を中心に改修を行いました。

子どもたちの声もまとめまして、大阪府教育庁のYouTubeチャンネルに動画をアップしましたので、よろしければ記者の皆さんもご覧いただければと思います。

教育行政の大きな課題ですが、やはり綺麗な施設で学ばしてあげたいと当然我々も思っています。

しかし、学校施設というのは1校建て替えをすると、それこそ多額の費用がかかってまいります。ですので、躯体がしっかりしているうちに長寿命化改修工事という事前の施策もうっていきますが、それでもやはりお金もかかりますし、期間もかかります。

であるならば、今、通っている子たちを少しでも快適に学ぶことができるようにという思いで、今回モデル事業として実施しました。YouTubeで子どもたちの声も聞くことができますので、ぜひ、ご覧ください。

**③大阪府学校部活動・地域クラブ活動指導者人材バンクシステム『ええコーチOSAKA』について**

大阪府教育委員会では、公立中学校における休日の学校部活動の地域連携・地域移行に向けた取組みを進めています。この取組みを進める上では、長期的に生徒にとって望ましい、スポーツ・文化芸術環境の構築が必要不可欠です。

このたび、学校部活動や市町村の地域クラブと、指導を希望する方とを円滑にマッチングするために、大阪府学校部活動・地域クラブ活動指導者人材バンクシステムである「ええコーチOSAKA」を本日から開設いたしました。

このシステムにより、「部活動指導員」および「地域クラブ活動指導者・サポート団体」の発掘・把握から、府内市町村等の求めに応じた人材・団体の照会が可能となります。

なお、このシステムの名称である「ええコーチOSAKA」は、昨年末に募集を行い、応募いただいた842件の中から選定したものとなっています。この場を借りて感謝を申し上げます。

指導者の登録は無料です。18歳以上の方が対象で、システムへの登録は3分程度で終わります。スマートフォン等から手軽にアクセスができ、指導者を募集する地域は府内全域となります。報酬や交通費等については、市町村や地域クラブなどの方針により異なります。

ぜひとも、多くの方々にご登録いただき、大阪の子どもたちのスポーツ・文化芸術活動の指導に携わっていただきたく存じます。

併せて、このシステムと連動した専用ポータルサイト「大阪府部活動改革プラットフォーム」も開設しました。

このサイトでは、指導者の資質向上のための動画教材や、自治体内の複数校への対応および体験型イベント等の開催のための指導者派遣にご協力いただける企業や大学等の情報を順次紹介するコンテンツを搭載しています。

**④府立出来島支援学校への就労系障がい福祉サービス事業所の併設について**

昨年11月の記者会見で説明しました、福祉サービス事業所の公募結果です。今回の公募は、就労を希望する障がい者に対して、一定期間、就労に必要な知識の習得や訓練などを行う就労移行支援事業所を運営する事業者を、企画提案型により募集をしたものです。

選定委員会による審査の結果、合同会社KAKURA（かくら）を最優秀提案者に決定しました。今後、賃貸借契約を締結し、令和8年2月に就労移行支援事務所を開設する予定です。

府教育委員会としても、当該事業者と連携し、障がいのある子どもたちの社会的自立の実現に資する取組みを進めてまいります。

**⑤府立弥生文化博物館　ミュージアムギャラリーの開催について**

弥生文化博物館では、3月16日土曜日まで、ミュージアムギャラリー「神々の微笑・日本文化の根源を求めて　小灘一紀　日本芸術院賞受賞記念『古事記』絵画展」を開催中です。

小灘氏は堺市在住の洋画家で、1995年から毎年、同館の絵画コンテスト「卑弥呼の時代を描こう」の審査員を務めていただくなど、大変縁の深い方です。

今回の絵画展は、小灘氏が2023年に日本芸術院賞を受賞されたことを記念して開催するもので、本受賞作品を含め、近年の『古事記』を題材とした作品や、身近な大阪の風景画を展示しています。

会期中は、小灘氏の講演会や小中学生対象の絵画指導のほか、混成合唱団のコンサートなど様々なイベントをご用意して、皆さんのご来館をお待ちしております。

**⑥府立中之島図書館 新館完成記念特別展「貴重書のみどころ」の開催について**

中之島図書館では、令和3年度に着手した書庫の耐震改築工事が完了し、このたび、新館が完成しまして、2月8日からエレベーターと渡り廊下が利用可能となります。

当館は明治37年に開会し、令和6年に創立110周年を迎え、記念事業に取り組んでまいりましたが、事業の締めくくりと新館の完成を記念しまして、特別展「貴重書のみどころ」を、2月8日から22日まで開催します。

当館が開会以来、収集を重ねてきた蔵書のうち、どのような書籍が貴重書に選ばれ、大切に保存されているのか、わかりやすい解説とともに紹介します。

また、開館120周年記念「社史展示」を1月25日まで開催しています。これらの展示を通して当館が提供する2大サービス「大阪資料・古典籍」と「ビジネス資料」に親しんでいただければ幸いです。

**⑦府立中央図書館の新コンセプトと関連イベントについて**

府立中央図書館は、「Library for Well-being　豊富な蔵書と調べもの相談の総合図書館」という新しいコンセプトを定めました。「これからの図書館、未来の図書館を見越して、新しい打ち出しができないか」と私が館長といろいろと議論をしまして、中央図書館の職員から50以上の提案を受けて選定されたものです。

Well-beingとは、健康、幸福、福祉などに直訳される言葉ですが、馴染みがあるのは、やはりＳＤＧｓの目標3ですね。「すべての人に健康と福祉を」にも「Good Health and Well-being」とあります。

中央図書館は、都道府県立図書館としての本来機能を維持・発揮しつつ、学びを通じた「人づくり・つながりづくり・地域づくり」の推進や、Well-beingの充実、実現に貢献したいと考えております。

関連イベントとして、Well-beingの向上に向けて、府民の皆様が製作された絵画やリース、裁縫など様々な作品を展示する「生涯学習作品展」を行います。展示期間は2月22日（土曜日）から3月6日（木曜日）までです。

皆様には、全国トップクラスの豊富な蔵書と、調べもの相談件数を誇る府立図書館を引き続きご利用いただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

**〇教育長による学校訪問**

教育長による学校訪問は、1月16日に守口市の芦間高校に訪問して参りました。

【質疑応答】

**〇大阪府立高等学校入学者選抜制度改善方針（案）における入試の基準日、前倒しの可能性について**

（朝日新聞）

入試制度改革について伺います。基準日が3月1日ということですが、この基準日の定義を教えてください。例えば曜日などの関係で前後するという意味でよろしいでしょうか。その場合、2月などになる可能性もあるのでしょうか。

（水野教育長）

ご案内の通り、年によって曜日がずれますので、そういう意味での基準日となります。

（朝日新聞）

とすると、2月になることもありうるということでしょうか。

（水野教育長）

まだ素案の段階ではございますので、2月になることも含めて2月になることになったときの影響や、しかも2月だと閏年の日程もありますので、その辺りの細かいところはこれから調整をしていきますが、現段階では基準日として3月1日としております。

（朝日新聞）

前倒しした日程ですが、都道府県レベルでみて、この入試日程は全国的に早いものなのか、それでもまだまだ遅いものなのか、平均的なのか、その辺り、データもあれば教えてください。

（水野教育長）

細かいところはこの後のブリーフィングで聞いていただければと思います。全体的なトレンドとしましては、公立高校の入試も少し前倒しにはなってきておりますが、大阪府の今回の案が特別にとても早いという理解ではございません。

**〇入試制度改革：将来的に描く府立高校の姿について**

（毎日新聞）

今回の入試制度を改革していくということで、将来的にどのような府立高校の姿を描いてらっしゃるのか、改めてお願いします。

（水野教育長）

今回、いくつかの改革の内容を素案としてお示ししました。一つめの「アドミッションポリシー」、つまり学校が求める人材を優先的に合格者として選定していくという意図、やはりここが一番私としては大事だと思っています。

なぜかと言いますと、皆さんの会社の入社試験などにおいても、決してペーパーテストだけではなく、おそらく会社が求める人材にかなう方なのかどうかをはかり、採用されていると思うんですね。

大学入試においてもＡＯ入試という言葉が定着してきましたが、まさに幅広い子どもたちの個性や求める人材にかなう入試制度というものが以前よりありました。そのような流れは、この多様な社会になりつつある日本において、高校入試にも一定必要であろうと考えています。

しかし、もしかしたら入試というのは、子どもたちが人生で初めて自分たちで進路を主体的に選べる大事な機会かもしれないので、公平性というものも担保していかなくてはなりません。

大学入試や就職活動と全く同じようなとり方はできないかもしれませんが、やはり学校の求める人材にマッチする人材として入ってくること、そして、子ども側の視点で言うと、3年間その学校で学んで、なりたい自分になるための学校選びというものを進めてほしいという大きな考えがあった上での今回の改革だということです。

もちろん日程や複数校入試に関してはまた違う意図ももちろんございます。まず、アドミッションポリシーに関してはそのように思っております。

**〇アドミッションポリシー枠の導入による経済格差の影響の懸念について**

（ABC）

アドミッションポリシー枠について伺います。先ほどの教育委員会会議の中で、委員の皆さんからのご指摘もありました。例えばボランティアであるとか、スポーツ活動であるとかが関係してくるとなってくると、いわゆる経済的格差が直接影響する可能性が高いといいますか、経済的に余裕がある家庭の方がいろんな経験をさせられるので、有利になる可能性もあると思いますが、こうした課題については、水野教育長はどういうふうに取り組まれていかれるご予定ですか。

（水野教育長）

少し大きな話になるのですが、現状の入試制度が批判される一つの論点として、知識や、いわゆる点数主義・正解主義で全てが決まっていくことに対する反論が従来あったわけですよね。

そこに対してアメリカのようなＡＯ入試の拡大がどんどんなされていったところで、家庭が裕福であればよりいろんな体験ができたら、結果入試に経済格差が生まれるじゃないかという、またもう一つの反論が生まれてきたという背景があると思っています。

そこで今回我々が考えているのは素案にもふれていますが、何かの実績や受賞歴、例えばボランティアの認定書などを加点要素とするというのは特に書いてないんですね。

あくまで、そのような経験から何を感じたかというのは問うかもしれませんが、その結果の実績において加点されることは現段階では考えてはおりません。

ただ、ここもなかなか難しいです。旧来の批判された入試制度は、ある意味、知識・記憶力・努力によって、経済格差を乗り越える一つの手法でもあるという、元々反論されていたところが輝いてくるということも今、出始めてるんですね。

世の中の流れを見ていきながらも、大阪府の入試制度としましては、やはりアドミッションポリシーというものを、少しバランスをそちらにきっていきたいというところが趣旨ではあります。

**〇アドミッションポリシー枠の上限値について**

（ABC）

となると、こちらの案にも書いていますが、最大で50％、それからこのアドミッションポリシー枠を設けるか設けないか、その学校によるという認識でよろしいですか。

（水野教育長）

原則としては設けます。全ての学校に設けてはいくのですが、パーセンテージは変わってくるであろうと思います。

（ABC）

教育長としては「最大50％」というのは、50％に近い数字の方が望ましいとお考えなのでしょうか。

（水野教育長）

これについては正直、府立高校それぞれの特徴や通う子たちの性質のところもありますので、50％上限値いっぱいが全て好ましいかとは、私個人的には思っていません。学校によって、まさにそこも特色があっていいんじゃないかとは考えています。

**〇入試制度改革による教員への負担増の懸念について**

（ABC）

この入試制度に関しては、入試の採点等に当たる教師の方々の勤務であるとか、そういった負担も軽減しようという流れもあったかと思いますが、このようにアドミッションポリシー枠という、かなり新しい斬新な枠が導入されると、教師の方々の負担にもなるんじゃないかと思いますが、その辺りはどのようにお考えですか。

（水野教育長）

何事も新しいことをするには負担が生まれます。ここはもう大原則です。ただ、教員の働き方改革に資するところに過度な負担をかけることは、当然控えていくべきだろうと思っております。そのあたりの議論はこれからまさにしていきますし、令和10年度を見越して、いろんなテクノロジーの発展・発達・導入というのも期待されるところです。ここは現段階で言えるのは、おっしゃるように、教員の過度な負担がかからないように、とはいえ変化には、一定負担があるという前提を認めつつも、バランスとって進めていくというところが回答にはなります。

**〇学校の魅力や特色の打ち出し方について**

（産経新聞）

引き続き、アドミッションポリシーの部分で聞かせてください。まだ案の段階ですが、従前からかなり議論がされ始めているところなので、教育長のお考えとしてお伺いします。

アドミッションポリシーを導入するにあたっては、学校側自身が特色は何なのかっていうところを考えなければならないということで、かなり意識改革が求められる部分だと思います。そこにおいて学校側にどういう考え方を持ってほしいと呼び掛けていくのか、教育長としてなにかお考えがあれば教えてください。

（水野教育長）

おっしゃるように、このアドミッションポリシー枠というものを良くしていくためには、前提として、各校のアドミッションポリシーが明確である必要があります。大前提です。

そのアドミッションポリシーが明確にあるからこそ、そういう人材を選抜する手法について、議論がされていくわけです。

そしてそこでの評価をしっかりみていく中で、そういう思いや資質を持って入ってきた最大50％の子たちを3年間で、どのような子に育てていくのかというグラデュエーションポリシー、どのようなカリキュラムを組んでいくのかというカリキュラムポリシーというところにも、当然紐づいてきますので、今記者がご指摘のアドミッションポリシー枠において大切にするところとしては、どのようなアドミッションポリシーを設定するのかがまさに重要になります。

教育庁としましては、すでに各校長、学校に対し、特色や魅力を作っていきましょうという議論は、何も今始まった話ではございません。

すでにその辺りは考えていただいているものと思っていますが、やはり入試に影響するのであれば、よりそこを明確にする必要がありますので、今回の素案を示し、校長先生方にもそのあたりのご意見も聞いていきたいです。逆に我々の方からもこういう形で考えているのでどうですかと話はしていくつもりです。

ただ、先ほどと同じ回答になり、大変恐縮なんですが、各校の現段階の特徴によって出しやすいところと、出しにくいところはあると思います。例えば、工科高校ならば結構、特色を出しやすいのかと思います。

また、例えば普通科の中で学力的に真ん中ら辺のところならば、地域性を出していくのか、はたまたどのような人材を育てていきたいのかなど、どのような特色を出していくのかと、私としては面白い議論になるのではないかと期待しています。難易度は高くなるかもしれませんが。

そういうところも含めて、大阪府の全ての府立高校が、そういうアドミッションポリシーを改めて考えていただく機会になれば嬉しいですし、そうなることが、今後の大阪の子どもたちの成長に繋がっていくと私は確信をしてます。

**〇アドミッションポリシーの一貫性について**

（産経新聞）

素案を読み込めておらず、記載があれば申し訳ありません。府立高校の場合、転勤等で校長先生は変わっていきます。私立のようにある程度固定された人材で大きく、長期的な方針を決めていくという体制にない中で、府立高校で個性を決めて、校長が変わった途端に大きく方針が変わってしまうということもありえます。そういった部分に関してどのように一貫性を担保していくのか、どのようにお考えですか。

（水野教育長）

企業も社長が変わると、その根幹は変わるでしょうか。経営でも一緒だと思います。社長が代がわりしたときに、創業の精神というものはあまり変わらずに、ブランドステートメントは変わっていくこともあろうかと思います。

中長期計画や、今年度ビジョンもおそらく新しい社長によって変わると思います。この府立高校のトップである校長先生に関しても、今回定めたものを、スクールアドミッションポリシーに関連するスクールミッションになってきます。スクールミッションは、単年度で変わっていくものではなく、民間企業でいいますと、創業の精神や、中長期ビジョンの上位に当たるようなものにあたると認識をしております。

ですので、校長先生が変わることによって全く影響がないとは言いません。むしろ変わることでの変化もプラスに捉えることは当然できますので、その学校の色を持ちつつ、校長先生方が時代に応じて、校長先生が変わる中で、個性を発揮していき、学校の色がより色濃くなっていけばいいと思います。

場合によっては、何年か経ったときに、ある高校のアドミッションポリシーは変更をかける必要があるという議論があれば、それも私は結構だと思います。ただ、短期間に何度も変わるものではないとは考えています。このあたりも、おそらくそういうご指摘、議論の中で出てくるとは思っております。

**〇大阪府立高等学校の姉妹校提携に向けて**

（日経新聞）

一部報道で、府立高校の全校に姉妹校を設けて、そのうち約20人程度を留学させるという報道がありました。この点についての検討状況について、もし進捗があればお願いいたします。

（水野教育長）

メディアの皆さんにも取り上げていただきまして、各担当課の方にも取材をいただいております。今、検討状況としては、府立高校全てにおいて姉妹校提携をしていこうということがまず1点めです。

ここに関しては、現段階ではすでに49校、姉妹校提携が結ばれています。令和9年度を目標に、残りの高校において提携を結んでいき、全ての府立高校が姉妹校提携をするところです。

ただ、この姉妹校提携を結ぶこと自体が決して目的ではありません。総合教育会議の内容はご覧いただいたことはありますか。その会議の中での知事からの、「子どもたちに生きた英語、外国の方々とのコミュニケーションを臆さずできるオープンマインドがそもそも大事だ。」というご意見から端を発した議論にはなりますが、私も同感でした。

ちなみに記者の皆さんは、「英語を話せますか？」と聞かれたら、堂々と手を挙げることができる方はいらっしゃいますか。いかがでしょうか。私も、聞かれたら黙って下向くと思います。

でも皆さん、中学校・高校、場合によっては大学等でも英語を学んでこられたので、例えば「Can you speak English?」と聞かれたら、おそらく、「Ｉ can`t speak English」と言うと思うんです。

でも、外国人の方からすれば、いやいや喋れてますよというツッコミが来るんです。これはなぜかと考えたとき、多分我々日本人は、学校で読み書きはかなりの長期間、専門的に高度に、系統立てて学んでいるのですが、いざ外国人の方とのコミュニケーションとなると、通じるかな、通じなかったら恥ずかしいかななど、単語の羅列でも通じるはずなのに、そういうマインドの部分で使えないのが日本人の英語の課題かなと私自身も思うところがありました。

ですので、今回知事が総合教育会議でそのような発言をされて、しっかり政策を進めようということでしたので、子どもたち、高校生たちに学校で学んだ英語をしっかり使う場所、そういう機会を作っていこうということが大きな趣旨です。

その機会を作るために姉妹校を提携しまして、提携した姉妹校とオンラインで対話をしたり、短期交流で実際にホームステイなどをしたりして、今まで学校で学んだ英語でコミュニケーションをとってみる。そういうところの補助としまして、1人当たり10万円をつけるというところです。

ですので、この大枠でいうと交流に係る予算と、その手前の姉妹校提携に係る予算と、さらにその手前、英語の発音や文法はやはりもっと学んでほしいので、「BASE in OSAKA」というＡＩツール搭載した英語のアプリを無償で提供するという、3段構えの政策になっております。

予算規模としましては、来年度は2.6億円の予算を計上予定となっております。

**〇入試制度改革による影響について**

（朝日新聞）

入試制度改革の話に戻ります。一般選抜に関しては実質的に日程が前倒しになるということですが、空白の1ヶ月間が生じるということで、中学校側にとってもカリキュラムの変更や進度の問題などもあると思いますし、学力の低下を懸念するような声もあったかと思いますが、そうした懸念というのは今回の制度改革で、払拭できるというふうにお考えでしょうか。

（水野教育長）

変化ですので、やはり様々なデメリットとメリットは当然両方ありまして、今おっしゃったようなデメリットを最小化していき、我々が変化に対する目的のメリットを最大化していくというところをこれからその素案をもとに議論していきます。

当然そこの手前の議論というのも重ねてまいりましたので、一定、道筋ができるであろうとは思っております。

（朝日新聞）

それは今後、案に対して出てくる意見を受けて、修正もありうるということでしょうか。

（水野教育長）

もちろん、案の状態ですので3月の会議までに修正もありうるかとは思っています。

（朝日新聞）

入試制度改革の話を進める前提として、現状として府立高校の不合格者が多数出ており、一方で定員割れの学校が半数程度あり、いわゆるミスマッチのようなことも起きていて、今回の改革ではそういった偏りといったものが改善されるというふうにお考えでしょうか。

具体的に例えば、現状から定員割れの学校はこれぐらい減るのではないかなど、そういった試算があれば教えてください。

（水野教育長）

そこをこの政策の一つで全て解決するというわけではなく、従前より申し上げてますように、そもそもの中学3年生の生徒数がこれから減っていく流れで、府立高校の役割というのを果たしていかなくてはいけないこと、しかしながら、ダウンサイジングというのも一定当然していかないといけないこと、いろんな要素がある中での入試制度改革の変化ですので、ここだけの影響で今おっしゃった懸念が払拭される、全部解消されるというのは、難しいと思っております。このあたりは総合的な政策としてめざしていくところです。

【水野教育長より】

**〇大阪府立中央図書館の新コンセプトについて**

皆さんのイメージでは、「本を静かに読む」、「本を借りる」、そういう場所が図書館だというイメージがあると思います。

私は海外のいろんな図書館に行くのも好きでして、いろんなところを見ていくのですが、結構騒がしかったりするんですよ。

みんな楽しそうなんです。日本の図書館ってなぜこんなに静かなんだろう、子どもが少し声が大きくなっただけでお母さんが気を使って外に連れ出すというのはいかがなのかといったときに、コンセプトが本を静かに読む、静かに過ごす、本を借りる場所というコンセプトだからそうなんじゃないんですかという館長との話を受けて、中央図書館の職員みなさんが議論を重ねていただき、「コンセプトを変えるならこれだ！」と変えていただきました。

このコンセプトを変えることで、運営が変わっていったり、企画も変わっていったりすると思うんです。

今後の日本の図書館ってどういうあり方がいいんだろうかっていうところを踏まえて、また注目いただければありがたいです。